

申命記 10 : 14、ルカによる福音書 20 : 20～26  
「神のものは神に返しなさい」

【前奏】【招詞】詩編 124 : 8

【祈祷】司式長老

【聖書】申命記 10 : 14、ルカによる福音書 20 : 20～26

【説教】「神のものは神に返しなさい」

<神さまのもの>

わたしたちは、神さまのものです。わたしたちの命は、神さまが造って下さいました。そして、わたしたちが生きるために必要なものも、大切なものも、この世界も、すべては神さまのものです。

でも、わたしたちは、自分の命や人生が、神さまのものであること。自分が持っているものは、神さまが与えて下さったものであること。そのことを、簡単に忘れてしまいます。あるいは、知らないでいます。

自分の人生は自分のものであり、自分の目的、自分の望みを叶えるためにあるのだ、と考えている人が、世の中にはたくさんおられるでしょう。

それに、今自分で手にしているものは、自分の努力で勝ち取ったものだ。自分が生きるために必要なものは、自分の手で、汗水流して得てきたものだ。多くの方が、そう思っておられるかも知れません。

でも本当は、それを手に入れるために必要だった、健康も、時間も、環境も、努力をする能力も、すべては神さまが備え、与えて下さったものなのです。

わたしたちは、神さまが、わたしたちの神さまであること。わたしたちの主人であること。すべては神さまのものであることを、忘れてはなりません。

そして、神さまは、わたしたちがその恵みの中で、感謝と喜びをもって、隣人と恵みを分かち合っ、共に生きることを望んでおられる。そのことを、忘れてはなりません。

そのことを教えられているのが、今日のイエスさまの、「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」との御言葉なのです。

<「ぶどう園と農夫のたとえ」の続き>

さて、今日のこの御言葉は、前回の 20 : 9～19 にあった「ぶどう園と農夫のたとえ」に続いて語られています。ですから、その流れの中で、今日の御言葉も聞く必要があります。

ちょっと振り返ると、たとえ話は、このようなものでした。

ある主人がぶどう園を持っていて、それを農夫たちに貸しました。時期が来て、収穫を納めさせるため、主人は農夫たちのところに自分の僕を送ります。しかし農夫たちは、主人に収穫を渡したがらず、遣わされて来た主人の僕を痛めつけ、手ぶらで返すのです。それが何度か繰り返され、最後には主人が、自分の愛する息子なら、農夫たちも敬って対応してくれるだろうと期待して、愛する息子を送り出しました。しかし農夫たちは、跡取りを殺せばぶどう園が自分たちのものになると思って、息子を殺してしまった、というお話です。

これは、農夫たちが、主人に納めるべき収穫と、貸してもらっている主人のぶどう園を、自分たちのものにしようとした。自分が主人になろうとした、というたとえです。そして、その欲望のために、主人の愛する息子でさえ殺してしまう。たいへん酷いお話です。

しかし、イエスさまは、このたとえ話を通して、神の民、ユダヤ人の指導者である律法学者たちや祭司長たちが、まさにそのようなことをしている、と指摘しておられるのです。

ここで、農夫たちとは、ユダヤ人の指導者たちを指しています。ぶどう園の主人は、父なる神さま。農夫たちが主人から預かっているぶどう園とは、指導者たちが、神さまから、教え導くようにと預かっている、イスラエルの神の民、ユダヤ人たちです。

指導者たちは、神さまの民を、正しく教え、神さまの御許へ導くことを委ねられています。しかし、指導者たちは、いつしか自分たちが人々の上に立つ者として、敬われ、重んじられることを求めるようになっていきました。人々を、神さまの方にではなく、自分たちの方に向かせようとしているのです。

神さまは、悔い改めさせようと、何度も預言者たちを遣わされました。これが、農夫のところにも何度も送られた主人の僕たちです。しかし、御言葉を受け入れない。聞こうとしない。

最後に神さまは、愛する自分の息子、つまり、神の御子イエスさまをお遣わしになります。しかし、指導者たちは、イエスさまが、自分たちの神さまへの態度を手厳しく批判し、また民衆の人気を集めているので、強い敵意や妬みを抱いていました。そしてとうとう、殺そうとするに至っていたのです。

前回の最後のところ、20：19には「そのとき、律法学者たちや祭司長たちは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと気づいたので、イエスに手を下そうとしたが、民衆を恐れた。」とありました。

彼らはイエスさまが、自分たちの神さまに対する態度を、厳しく批判しておられることが分かった。でも、イエスさまは民衆に人気があり、民衆を敵に回すのが恐ろしかったので、イエスさまを殺したかったけれども、手を出せなかったのです。

そして、今日の20節、「そこで、機会をねらっていた彼らは、正しい人を装う回し者を遣わし、イエスの言葉じりをとらえ、総督の支配と権力にイエスを渡そうとした。」ユダヤ人の指導者たちは、自分たちの手を汚さずに、総督、つまり当時このユダヤの地域を支配していたローマ帝国の支配と権力を使って、邪魔者であるイエスさまを消そうと考えたのです。

### < 巧妙な質問 >

さて、彼らは「正しい人を装う回し者を遣わし」とあります。正しい人とは、神さまの御言葉に従う人のことです。彼らは、神さまに正しく従い、神さまに喜ばれる歩みをしたいと願っている人のフリをして。イエスさまに真剣に教えを乞うフリをして、尋ねました。

「先生、わたしたちは、あなたがおっしゃることも、教えてくださることも正しく、また、えこひいきなしに、真理に基づいて神の道を教えておられることを知っています。ところで、わたしたちが皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか。」

「わたしたちが皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているか、適っていないか。」

ユダヤ人たちの都であるエルサレムは、当時ローマ帝国が支配していました。つまり、その地域の支配者はローマ皇帝であり、そこに住む人々は、皇帝に税金を納めなければならなかったのです。

まず通常、国民が王に税金を納めることは、当然のこととされており、ユダヤ人の律法においても認められていることでした。

しかし、ここで問題になるのは、選ばれた神の民であるユダヤ人たちが、神さまを知らない異邦人の「ローマ皇帝」に税金を納めるのは、律法で正しいかどうか、ということです。

ユダヤ人の律法には、異邦人の王に対してどうするか、ということは書かれていません。そこで、「真理に基づいて神の道を教えておられるイエスさまなら、これをどう考えて、どう対応しますか」と、解釈を尋ねたのです。

ちなみに、わたしたちの教会は、国家との関係において、それらの世の権威もまた、神さまによって立てられたものである、と受け止めます。新約聖書において、初代教会ではローマ帝国の支配下の時でさえ、「神を畏れ、皇帝を敬いなさい」と教えられてきました。

教会と社会は切り離されているわけではありません。教会はこの世の中で、御言葉を宣べ伝え、神さまの御心に従って、神さまと世の人々に仕えていくのです。神さまの主権の下にあって、信仰者は為政者のために祈り、税金を納め、国の法律に従っていきます。

もちろん、一番に従うべき方が神さまであることは、決して揺らいではなりません。

しかし、今日のところで問題なのは、この質問はユダヤ人指導者たちが、イエスさまのお答えの言葉じりを捕らえ、貶めるために質問したということです。質問の意図はこうです。

まず彼らは、イエスさまが民衆から人気があるのを妬んでいたのですが、その民衆の一部は、イエスさまのことを、ローマ帝国の支配から解放し、各地に散らされたユダヤ人を集めて、イスラエルの王国を再建してくれる「メシア」だと期待していたのです。

そこで、もしイエスさまがこの質問に、「皇帝に税金を納めるのは、律法に適っている」と答えたとしましょう。実際イエスさまは「皇帝のものは皇帝に」と言われました。

するとそれはイエスさまが、異邦人の皇帝に、神の民が支配されている今の現状を、受け入れていることとなります。それは、民衆にとっては期待外れで、「なーんだ。イエスさまは、『皇帝に従う必要なんかない、そんな者は打ち倒せ！』とは言ってくれないのか」と、失望することとなります。そうしてイエスさまの人気を失墜させることが出来るのです。

一方で、もしイエスさまが、「皇帝に税金を納めるのは、ユダヤ人の律法に適っていない。異邦人の皇帝への納税は、神の民の律法からすれば、正しくないことだ」と言ったとしましょう。実際、彼らはこの答を引き出したくて、回し者を送る時に「正しい人」、つまり、律法に忠実に、神さまに誠実に従おうとしている人を、装わせたのです。

イエスさまが「皇帝への納税は律法に適っていない」と言ったなら、それは「皇帝には税金を納めるべきではない」、という意味に理解できます。

するとこれは、ローマ皇帝への反逆と見做されます。これを聞いた者が、「イエスという者は、民衆に皇帝への納税をするなど言っていた」と告げ口すれば、ローマ帝国がその支配と権力のもとで、反逆者としてイエスさまを捕らえ、処分することになるでしょう。

そうなれば、自分たちの手を汚すこともなく、一番、願ったり叶ったりです。

「わたしたちが皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか。」

この質問は、このように、どちらを答えてもイエスさまの不利になり、必ずイエスさまを貶めることが出来る質問で、彼らからしたら、考え尽くされた、完璧な罠だったのです。

<見抜かれたたくらみ>

しかし、イエスさまは、この彼らのたくらみを見抜いておられました。それで、まずこう言われたのです。「デナリオン銀貨を見せなさい。そこには、だれの肖像と銘があるか。」

デナリオン銀貨とは、当時流通していたローマ帝国の貨幣です。一デナリオンは、当時の一日の賃金にあたる金額で、一日の終わりに、雇い主がそれを一枚、労働者に渡すような、誰にも身近な銀貨でした。だから、言われたら誰かが、すぐにスッと出すことが出来ました。

そのデナリオン銀貨には、皇帝の肖像と、銘が刻まれています。肖像は、月桂冠を頂いたカイサルの横顔。そして、それを囲むように、「神とされたアウグトゥスの子、ティベリウス・カイサル、アウグストゥス」という銘が刻まれています。

イエスさまに「だれの肖像と銘があるか」と聞かれて、回し者らは、すぐに「皇帝のものです」と答えました。

それでイエスさまは言われたのです。「皇帝のものは皇帝に。神のものは神に返しなさい。」

まず一つに、ここでイエスさまは、ユダヤ人の指導者や回し者らが、ローマ皇帝の肖像と銘が刻まれたデナリオン銀貨を、当たり前のように持ち歩き、当たり前のようにそれを使って生活していることを、明らかにされます。

つまり、彼ら自身が、異邦人のローマ皇帝の支配の許で、現実に生活を営み、経済活動をし、皇帝に税金を納めて生きているのです。

「皇帝のものは皇帝に」。彼らはもう、この秩序に従って生きているのです。

その自分たちのことを棚に上げながら、イエスさまに、皇帝に税金を納めることは、神さまの律法に適っているかどうか、正しいことかどうか、と聞いて、「正しくない」との答えを引き出したいと思っている。

しかし、そう答えられたら、それは実際にローマ皇帝の支配下で生活している自分たちもまた、神さまの律法に適っていない、神さまの前に正しくない、ということになるのです。

イエスさまはこうして、彼らが、皇帝への納税の質問で、イエスさまを貶めようとしながら、自分たちはデナリオン銀貨を持ち歩き、皇帝の支配の下で生活している。その矛盾を指摘されました。

彼らは、心から神に従いたいとか、神に喜ばれる生活をしたい、などと思って質問したわけではありません。ただ自分にとって邪魔なもの、立場を揺るがすものを、排除したいだけです。そして、信仰と生活が全く結びついていないために、こんな矛盾した質問が出て来ます。

イエスさまはこうして、彼らが装っている「正しさ」を、あっさり暴かれたのです。

<神のものは神に>

そしてイエスさまは、「神のものは神に返しなさい」と言われました。

これは、前回のぶどう園のたとえで言うならば、主人のぶどう園を借りて、仕事を与えられ、生活を支えられていた農夫たちが、主人に、当然返すべき収穫の一部を、返すことです。

それは決して、主人が農夫たちから、搾取しようとしたものではありません。むしろ農夫たちは、このぶどう園のおかげで、糧を得て、生活できているのです。

農夫たちが、ぶどう園の収穫の一部を主人に返さなければならないのは、そのぶどう園が主人のものだからです。収穫の一部を主人に返すのは、ぶどう園が主人のものである、ということを確認すること、確認することなのです。

しかし、農夫たちは、主人のものを、すべて自分のものにしようとした。しかも、息子を殺すという、最も残酷な仕方で裏切りました。

そのように、ユダヤ人の指導者たちは、神さまに帰すべき栄光を、神さまに向けていくべき民衆の心を、自分たちのものにしようとした。異邦人の権力者であるローマ皇帝は、神に背く者だ。神に敵対する者だ。そう言いながら、その異邦人の皇帝さえ利用して、神の御子イエスさまを殺し、自分たちが王のようになり、神さまから全てを奪おうとしているのです。

「皇帝のものは皇帝に。神のものは神に返しなさい。」

イエスさまは、彼らに問いかけておられます。「あなたたちは、わたしに、異邦人の皇帝は、神を知らない者、神に背く者であるとして、従うべきではない、と言わせようとしている。しかし、あなたたちこそ、本当に神に従う者なのか。あなたたちは、神に背いていない

というのか。あなたたちは、神を知らない異邦人とは違って、本当に神に従い、神の主権を認め、神に返すべきものを返しているのか。

『神のものは神に返しなさい。』あなたたちがまず、神のものを、神に返しなさい。与えられているものも、あなた自身も、すべては神さまのもの。すべては神さまが主権を持っておられるものである。それを認め、神さまに返しなさい。神さまにささげなさい。神さまが望まれることのために、それらを用いなさい。」そう、言われているのです。

<十字架へ向かう歩みの中で>

皇帝もまた、神さまのもので。ユダヤ人の指導者たちも、神さまのもので。わたしたちもまた、神さまのもので。世のすべては、神さまのもので。神さまがすべての支配者であり、王であり、主人であります。そして、それらすべては、神さまに栄光を返すために、神さまをほめたたえるために、向かって行くべきもので。

しかし、わたしたちは、自分が王になろうとするために。何でも自分のものにしたがるために。神さまに返すべきものを返さず、正しい人を装いながら、神さまに背いているのです。神さまの期待や忍耐を思わず、自分のことばかり考えているのです。

今日の箇所は、ユダヤ人指導者が、手厳しくイエスさまにやられたな、と痛快な物語として聞いている訳にはいきません。

「神のものは神に返しなさい。」これは、わたしたちに語られていることなのです。あなたは、神のものを神に返しているか。これは、わたしたちに問われていることなのです。

わたしたち自身の歩みを顧みれば、わたしたちは、神さまの御心から遠く離れた、どうしようもない歩みばかりしています。

人のものを見て妬み、欲しがり、手にしたものは自分のものにし、与えられたものを、神さまや隣人のためではなく、自分の栄光のために、自分の喜びのために使っている。

神さまから与えられ、神さまに返すべきものを、わたしたちが神さまから搾取している。それが、わたしたちの罪の現実なのです。わたしたちは何も返すことが出来ないのに、神さまに、罪の負債までも負っています。

こんなわたしたちは、どうやって「神のものを神に返す」歩みが出来るのでしょうか。深い、深刻な罪に捕らわれているわたしたちは、自分の力で、この罪から抜け出すことは出来ません。

しかし、今日のこのイエスさまの教えは、イエスさまが十字架の死へと向かう、受難週の歩みの中で語られたことを、わたしたちは心に留めたいと思います。

イエスさまは、このやりとりの数日後、これらのユダヤ人の指導者の罪も、わたしたちの罪も、すべて背負って、十字架の死へと向かって下さったのです。

そうです。結局、ユダヤ人指導者たちの目論見は実現しました。彼らはローマ帝国にイエスさまを訴え、イエスさまは裁判を受けて死刑になり、十字架に架けられたのです。

しかしまた、その人の神さまに対する罪が極まったところにおいて、神さまは、イエスさまの十字架の死を、わたしたちの罪の贖いとして下さいました。イエスさまがご自分の十字架の死によって、ご自分の命によって、わたしたちの神さまに対する罪の負債を、すべて神さまに返して下さいました。まさに、捨てた石が、隅の親石となったのです。

イエスさまは、そうして、罪に捕らえられたわたしたちを、神さまのものとして取り返して下さいました。

「神のものは神に返しなさい」。イエスさまは、出来ないことをわたしたちに仰ったのではありません。イエスさまが、ご自分の命をささげて、わたしたちが返せなかったものを返して下さいました。イエスさまが、そのことを成し遂げて下さいました。イエスさまが、わたしたちを神さまのものとして取り返して下さいました。そのゆえに。イエスさまは、「あなたたちは神のものとして歩みなさい。神のものを、神に返す歩みをしていきなさい」と、言って下さるのです。

イエスさまにあってこそ、わたしたちは、自分自身を丸ごと神さまのものとして、与えられたものをすべて神さまのものとして、神さまのために喜んで用い、神さまに喜んでお返ししていく歩み出来るのです。

#### 【お祈り】

天の父なる神さま

イエスさまが、神さまから離れ、背き、あなたから奪おうとするような罪に生きているわたしたちを、ご自分の十字架と復活によって、あなたのものとして、神さまの子どもとして、生きる者として下さったこと。神さまの御許に返る道を拓いて下さったことを、感謝いたします。

わたしたちも、世界も、与えられているものも、すべてはあなたのものであります。すべてはあなたの恵みです。わたしたちが、神さまこそ、愛と恵みをもって支配して下さいる方であることを知り、神さまにこそ栄光を帰し、頂いた恵みを喜んでささげ、賜物を隣人と分かち合い、ますます神さまの深い恵みに与る者として下さい。

イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讃美歌】 506 「すべては主のため」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】 【主の祈り】

【讃美歌】 26 「グローリア、グローリア、グローリア」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン